

< 策 >

昨夜寝る前に、伊丹市にいる長男の道範から、「翌早朝に仕事があるから、木曜の飲み会は 5:00 から始めてくれないか。」との電話があった。ということは、西宮の扶美華(娘)の所へは 15:00 には着かなければならない。木曜日のコースは 70km 余りだがずっと市街地で、信号や歩道橋で時間を取られるのは分かっている。ハテ？どうしようか。何か妙案はないものか。

4 日目の距離は 60km 未満に抑えておきたい。ならば、スタート地点を先にずらそうか。どうやって？そうだ！電車だ、電車があるじゃないか。昨日はネガティブ使用だったが、今日はポジティブ使用でいこう。

朝起きるや否や、これだけのことが頭に浮かんだ。アルコールが入っていない分だけ冴えている。

支度を整え駅に直行すると、ありました、ありましたかな、御坊始発 4:58 難波行き。どこで降りたらいいかを、地図を出して計算した。この際だから、思い切って 20km 程パスしよう。そうすれば、昨日の分と合わせて 45km くらいの欠落になり、来年取り返しに来る動機が大となる。

地図を見ると、程良い所に湯浅という町があった。国道と駅が近い。

湯浅かあ。湯浅というのは、ここだったんだな。私のトライアスロン仲間が住んでいる所じゃないか。仲間と言っても、トライアスロンを始めた頃、四国の大会で 2 度会っただけだが、今でも年賀状の遣り取りはしている。こういう仲間は結構いる。会わないけれども、中元や歳暮を贈り合うとか。でも、この縁は切ったらいかんのよね。どちらかが死ぬまで続けなあかん、と思っている。

20 分で湯浅駅に到着。駅員さんに昨日から持っていた傘を、「これ使って下さい。」と手渡し 3 日目をスタートした。

湯浅は醤油の発祥地だ。あちこちに蔵元があり、仕込みをしているのだろう、麴と大豆の匂いが漂っている。

湯浅～有田は国道 42 号を行かず、海沿いの県道 20 号を通ることにした。天気はいいが、相変わらず風が強く寒い。北風だ。

ジャーニー 3 日目になると体が順応するのだろう、この日も脚は軽い。昨日あれだけ苦しめられた風にも向かっていける。小さな峠をいくつも越え、10km 先の有田市に入った。快走だった。

有田と言えば「みかん」だ。どこの家でも、庭先や菜園に植えている。2km 程の直線道路の両側が、ずっと黄金の垣根だった。歩道にいっぱい落ちている。「一つぐらい拾って食ってもええんとちゃうか。」と悩みながら走った。

有田大橋を渡る。右手に箕島高校が見えた。今は智弁和歌山だが、一昔前は甲子園常連校

だった。同期に島本耕平という、4番バッターでアイドル的な投手がいた。ピッチングは普通だったが、バッティングはもの凄かった。どこに何を投げても柵越えされるのでは、と思う程だった。それでも、プロでは鳴かず飛ばずだった。ハートの問題だろうか。同じ高校球児として、それが不思議でならなかった。もう40年も昔のことだ。

有田市街地を抜けると、目の前に広大な黄金の絨毯が広がる。42号線の両側、山の斜面全体がピッシリとみかんで埋めつくされていた。それが4~5km続く。これこそ真のオレンジロードだ。杵築や津久見が霞んでしまう。

オレンジロード峠を後にし、海南市へと下っていった。足どりは順調だ。湾内にある石油化学コンビナートを囲むようにして進んで行く。補給は有田と海南のコンビニにて、完熟南高梅入りのおにぎりにした。甘酸っぱくて元気が出る。このおにぎりは他所にはないらしい。

あっという間に海南市を過ぎ毛見トンネルを抜けると、いよいよ和歌山市である。まず右手に紀三井寺運動公園が見えた。JR紀三井寺駅までの3kmはステキな遊歩道があり、舗装が脚に優しくかった。至る所に木製のベンチが設けられていて、しばしば腰をおろして寸休止する。時刻は9:30で余裕だ。

旭大橋を渡り和歌山市街地に入った。都市の市街地は、どこを走っても単調で退屈だ。景色が変わらないのである。信号や歩道橋が多く、時間がダラダラと過ぎる。ここの5kmもそうだった。

やっと和歌山城跡に辿り着き、大きな交差点を左折して紀ノ川大橋を渡った。ここで「めし屋」に出くわす。メニューは昨日と同じだが、50円高の¥470-だった。場所代かいな。

5kmばかりゆっくりと上がって行くと、右側に和歌山大学が見えた。南海電鉄は通っているものの、ずいぶん不便な所にある。そう言えば、一昨年うち(マエダ塾)から一人受験に来て辺鄙なとこだと言っていた。こうやって全国を駆け巡り、自分の目で大学の位置を確かめて受験生に告げるのは重みがある。図らずも、ジャーニーが直接仕事に役立っているな。

和歌山市から国道は42号から26号に変わり、孝子(キョウシ)峠越えとなる。いろいろあった和歌山県とついに別れだ。名残は尽きないが、感慨に浸るどころではなかった。名前には趣があるが、とんでもない峠だったのだ。100%歩道がない、路側帯0%である。箱根峠もひどかったが、ここはずっとひどい。おまけに大型車の通行が頻繁だ。わたしゃ、どこを行けばいいの。生きた心地がしないよ。

神経をすり減らしながら峠を下り、精根尽き果ててしまったが大坂入りがなった。南電孝子駅で小休止をとる。しっかり休んで元気を取り戻すんだ。行ける所まで行っておきたい。

4~5km進んで、深日(フケ)の三叉路を鋭角に右折すると1.5kmで岬公園駅だ。ここから海に1.5km向かえば、今日の宿「おかの」旅館が見つかるはずである。今晚はどんな料理かな、と思いつつ左手にやり過す。まだ14:00過ぎだ。今行っても準備ができていない。明日のために諦めろ！

孝子駅からは南電の線路が26号線と並行しており、カット名人の私には頼もしい限りだ。淡輪、箱作、鳥取荘、尾崎と駅をパスしていく。いつの間にか道は府道に変わっていた。63号線だ。

その府道と線路が交差する所に吉見里という駅があった。時刻は16:30、もういいだろう。15km以上は来たに違いない。すぐ下り電車に乗り込み、アッという間に岬公園までバックした。都会の電車は普通でも速い。日豊線はのどか過ぎやねえ。

1500mほど迷いに迷い「おかの」に辿り着く。大阪湾が目の前だった。みさき公園には、伝統のある大阪ゴルフ倶楽部や各種スポーツ施設があり、そのお客が利用するらしい。一階はだだっ広い食堂でメニューが豊富だった。

今日の泊り客は私一人だ。大きな風呂と広い部屋に恐縮する。夏には府内の大学が合宿に使うそう。トイレの便座が異様に高くて楽だった。

食事は一階の食堂で、女将さんのお相伴付きだ。様々なことを話し、延々2時間お相手して戴いた。懸念の洗濯もその間にしてもらい、至福の一時だった。

料理は普通と言ったら申し訳ないが、家庭的な心温まるものだった。剣先イカと鰻の刺身にフライ、野菜の煮物に天麩羅、サザエの壺焼き、とこぶしの甘辛煮等がテーブルいっぱい並べられている。これを一人でやっつけるのだから、私の胃袋はすごい。

酒は、ビール大2本と日本酒2合でまずまずだった。ほろ酔い加減なところで腰を上げないと初日の二の舞になっちゃう。これだけ飲み食いし¥10000-でかなりなお釣りがきたのだから、私の宿を選ぶ目に狂いはない。食堂を出た瞬間ガッツポーズを決めた。

広い畳の間でゴロリと横になった。寝るのはベッドよりも畳の方が落ち着く。特に疲れている時は格別だ。やっぱり俺は日本人だったんだ。安心、安心、一安心。明日は半年以上も会っていない子供たちに会えるぞ、と心弾ませ眠りに落ちる重戦車だった。